



Wild Dolphin therapy in Panama City, FL

写真/文 越智 隆治



10年前から、アメリカはフロリダ半島の西の付け根に位置する、この観光都市を何度も訪れている。メキシコ湾に面したこの町の長い長いビーチ周辺には、約150頭のバンドウイルカたちが生息している、イルカを見に来る観光客の目を楽しませてくれている。といっても、飼育されているわけではなく、間違いなく自然な状態で生息しているのだが、その状況がちょっと変わっていて面白いのだ。

まず、ボートで湾内から遠浅の外洋へと出ると、チャンネルの入り口付近で必ずと言っていいほど、イルカたちに遭遇する。ボートのスピードを緩めて様子を伺っていると、イルカたちの方からボートに近づいてくる。そして、おもむろに、海中から顔を突き出して、まるで「こんにちは、よく来たね!」と言わんばかりに、僕の顔を覗きこんできた。

初めてこの地を訪れたときに、このイルカたちの行動が、とても野生のものとは信じられず、以前水族

館で飼育されていたのが、放し飼いになっているのではないかと感じてしまった。しかし、話を聞くと、古くから地元の猟師たちが、売り物にならない魚をイルカたちにあげていたことが理由で、こんな行動を取るようになったというのだ。

町やビーチから近くて、穏やかな海。水深も浅い。そんな環境に生息する一風変わった行動を取るこの野生のイルカたちの協力を得て、現在Water Planetという団体が、ワイルドドルフィンセラピーなるものを行っている。僕は、この団体の活動取材したり、ボランティアで手伝ったりするために、何回かこの地を訪れていたわけだ。

セラピープログラムの対象になるのは、主に自閉症児やハンディーキャップのある子供たちなど。今

度もニューヨークから来た自閉症の男の子がセラピーを行っていた。プログラムには、野生のイルカと泳ぐだけでなく、プールでの、アートセラピーやミュージックセラピー、ワツー（水中でのマッサージ）など、様々なプログラムが組まれている。

イルカと泳ぐことが、はたして自閉症児に良い影響を与えているのかどうか、自分では定かではないのだけど、数年前に、妻と一緒に訪れていたときのこと。そのときも、一人の自閉症の男の子がプログラムに参加していた。その子は、自分の半径数メートル以内に知らない人が近づくと、パニックを起してしまうことがあった。当然のことながら、自分から他人の身体に触れることも拒んでいた。このときも、何度かパニックを起こして、周囲を慌てさせたりしていた。

しかし、野生のイルカとのスイミングなどのプログラムを進め、多くのボランティアの人たちとも接するうちに、彼に変化が起こった。ある日、誰かが僕の肩に手をかけているので振り返ると、その男の子だったのだ。その後、その男の子は、僕の妻と手をつないで、公園を散歩するようになった。

その様子を見て、その子の母親は嬉しくて泣き崩れていたのを覚えている。決して、自閉症が直ったわけではないのだけど、自閉症児を持つ親にしてみれば、パニックになっていた要因から開放されただけでも、嬉しいことなんだろう。

今回、プログラムを受けている子に、どのような変化が見られるのかは、わからないけど、ボランティアの女性に抱きかかえられながら、初めて海で野生のイルカと遭遇したときには、ちょっとびっくりしながらも、嬉しそうに笑っていたのが印象的だった。

People by the Sea
Photo Column 08